

子どもの「やりたい」を実現する授業づくり

—子どもとつくるカリキュラムを手がかりに—

田中 優希 教職基盤形成コース 教育課題探究プログラム

キーワード：授業の軸，児童理解，学びの可能性，子ども主体

1. 問題の所在と研究の背景

小学校の教育現場にて、2つの場面に出会った。体育科の授業場面では開脚前転が上手くできない子への「どうすれば上手く回れると思う？」という教師の言葉に、その子は表情を曇らせた。そこには、教師の設定した到達すべき目標と、子どもが抱いた自身の課題とのずれや困難さから生まれる不安があったように感じた。また、生活科の授業場面では、子どもの「やりたい」という言葉から授業が展開し、子どもたちそれぞれがひとつの目標に向かって考え行動している姿があった。それは、本時の目標が子どもと共に生み出されたものであり、子どもたちの「やりたい」という思いをもとに動き出している姿だと感じた。これらの是非を問うわけではなく、子どもの「やりたい」はいかに育まれていくのか、また教師はそれをどのようにとらえ授業につなげているのかという問いを抱いた。平成29年告示の学習指導要領で重要視されている、子ども主体の学習の在り方について、実際の教育現場での教師と子どもの事実にもとづきながらその可能性を探っていきたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、子どもの「やりたい」を学びに向かう力とし、それが育まれた時の子どもをどのように教師はとらえ、次の時間や単元構想に活かしていくのかについて、年間を通じた実践をもとに明らかにし、子どもの「やりたい」が具現化する授業の可能性をカリキュラムの在り方から探ることを目的としている。

3. 研究の方法

「子どもとつくるカリキュラム」を作成し実践している信州大学教育学部附属長野小学校（以下附属長野小）にて訪問調査並びに、同校の思想的な背景となっているジョン・デューイの理論をもとに所属学級における図工科を中心としたカリキュラムを作成し、春・夏・秋と年間を通しての授業実践から考察する。

4. 実践

4.1 附属長野小「子どもとつくるカリキュラム」にみられる子ども観

大正期より、子ども主体の授業づくりを模索し続けている附属長野小の「子どもとつく

るカリキュラム」作成にあたっては、カリキュラムは子どもと共に創るものであり、常に更新し続けるということを大切にしている。また、同校のこうした取り組みの思想的基盤にはジョン・デューイの理念があるが、その著書『子どもとカリキュラム』について市村は「子どもとカリキュラムは単一の過程である」、「教育するということは、絶えざる再構成」であると翻訳している（デューイ 1998, p. 273）。その授業における課題を、子ども・教師のどちらかに偏るわけでもなく、子どもの「やりたい」をとらえた教師が如何に子どもと共に学習課題を設定するのが問われるのである。この点について、同校では、「うちから育てる」という教育理念に基づき、子どもは自ら学ぶ存在であるという子ども観にたっている。同校の実践事例には、まさに子ども主体とされる豊かな実践が具現化されている。

4.2 カリキュラム作り

（1）子どもとの出会いと題材設定

本実践にあたり、年間を通した学習活動を見通すために附属長野小3学年に所属させていただいた。同学級では羊の親子を飼育している。子どもたちは羊たちを中心とした生活を送る日々の中、野に出て春の訪れを心待ちにしている姿があった。この子どもたちと筆者がともに学びたいと感じたものとして、羊たちが食べ命をつなぐ葉っぱをスタンプする図工の活動が思い浮かんだ。一年間を通してその季節の草花の葉っぱを白黒のインクでスタンプすることを通して、羊の親子と日々自然体験園の草花を目にしている子どもたちだからこそ、日々の植物の生長や四季折々に魅せる美しさや面白さを感じることができると考えた。

（2）子どもの「やりたい」へのアプローチ

図工という教科の中での子どもの学びをふまえ、スタンプという技法そのもの、また画材や色合い、その季節ならではの植物の葉など教材研究を行った。当初の構想では、植物から直接的に想起される緑色の絵具を用いることを考えたが、それが本当に子どもの「やりたい」を引き出し、より豊かに表現していくことになるのかと指摘を受けた。そのような指摘ももとに、構想段階において筆者自身が様々な方法での教材研究を重ね、本実践では、黒色スタンプインクを用いてのスタンプを中心にカリキュラムを構想することにした。また、四季それぞれの植物の葉ならではの面白さ、そして学級で飼育している羊との日々とのつながりなどを想像しながら作成した。

4.3 授業実践より

（1）自分の願う表現を実現させていったK児の姿から

K児は春と夏では自分の好みの葉をスタンプしながらも、どうしても薄くなってしまふことに課題を感じていた。秋の作品に向けては、「もっと色濃くスタンプしたい」と願いをもち取り組んでいた。そこで筆者は、スタンプするインクの種類やスタンプ台そのものなどの教材研究を重ね、K児や同様の課題をもつ子どもの願いが如何に実現されるか考え続けていた。実際の授業場面ではスタンプする場面で、K児は色が濃く出るスタンプ台を用いてスタンプを行ない、さらに葉の先の方まで丁寧に紙に押し付けるなどの工夫を

して、色がしっかりとついたスタンプングをすることができた。「できた」と声をあげる K 児の表情からは、自分の願った表現ができたことへの手応えを感じている様子が伝わってきた。K 児の願いが実現するよう共に考え続けてきた筆者にとっても、この K 児の姿に喜びを感じずにはいられない出来事だった。この日、K 児は続けて何枚も作品を作る中、より色濃く出るように肘も使って上からぎゅっぎゅっと押さえたり、被せていたキッチンペーパーについた葉の跡にすら「見て、ここにも跡がついた」と面白さを発見したりしている姿があった。

（2）活動の中で自らの行為を見つめていった H 児の姿から

H 児は春のスタンプングの授業の中で、「死」という漢字を表した。筆者は戸惑いながらも、そのまま作品を受け取ることしかできなかった。筆者の中では、他者が目にしたときに悲しい思いを抱くのではないか、また命にかかわる言葉であり、「好ましくないのではないか」と指導すべきか考え続けていることであった。しかし、秋になり、春と夏の作品をフレームに入れたり、その作品から活動を振り返ったりする場面で、「これ他の人に見られたくないんだ」と悲しそうな表情を浮かべる H 児がいた。筆者には、春の作品に表した文字のことが浮かび、「少し 2 人で話をしよう」と声をかけた。「なにか感じたの？」と聞くと、H 児は、「殺すみたいな感じで、その時はふざけて書いたんだけど、今見たらふざけて書くような文字じゃなくて、すごくひどいこと書いていて、悲しくなったんだ」と、ゆっくり語った。「今はこんなことをしちゃだめだったんだと思えた自分がある。月日が経って改めて思えた自分がある。そう感じたことが大事だと思う」という内容の話をした。すると、表情が和らぎ、「先生これお願いします」と他者に見られないようにその文字の作品を、紙とビニールで包み、「ありがとうございました」と手渡した。後日、秋のスタンプングの授業では、その日スタンプングし黒色のインクが付いた葉をも大切に持って帰る姿があった。

（3）子どもの「やりたい」に応えようとする中での教師の学び

春の実践の中で、筆者は、子どもの「やりたい」という言葉に対して迷ってしまった。協働的に授業づくりにかかわっていた教員から助言を受けその場に臨んだが、半信半疑だった。子どもたちの実際の姿を見て、教材研究を重ねたことでその授業で大事にしたい教材の価値や指導の方向性など、いわば教師にとっての軸ができ、子どもの「やりたい」という思いに可能性を感じることもできた。また、H 児の姿に触れたことで、目の前の子どもの姿・行為について、その時点での教師の価値基準だけで善し悪しを判断するのではなく、「なぜそうしているのか」と、その時の子どもの行為や言葉の背景にあることを思い巡らすことが重要であると感じられた。子どもはその子なりの歩みで、確かに学ぼうとしている、自身を育てようとしているのではないかと感じられ、ここにも子ども観にかかわる軸があることが自覚された。このことは、子どもを放任することが「やりたい」に応えるということだけでなく、教師自身も可能性を見出せるような方向性をもって指導することの重要性として、授業観・子ども観の更新につながった。

5. 考察

教師が児童理解に基づいた教材研究で持ち得た軸を、子どもたちの「やりたい」という思いをもとに再構築していくような授業づくりを行うことで、学習活動がより豊かなものになった。子どもの「やりたい」に任せているだけの活動場面でも学びはあるかもしれない。しかし、教師が事前の教材研究で捉えていた魅力について授業を介して子どもと共に捉え直すことで、単に活動するよりも学習活動の意味や価値がより豊かになっていく。

また、材の魅力を発見し続ける子どもの姿に、子ども観の更新も起きる。このことにより次回以降の子どもの捉えや、教材の価値への捉えへの更新が起き、カリキュラムの再構成につながる。当初季節の移り変わりの中、その時その時に子どもが感じ取った面白さを中心に展開されていくと考えていた本実践のカリキュラムは、子どもたちとの歩みの中で、春・夏・秋と授業を重ねれば重ねるほどスタンピングから季節を感じ取ろうとする感覚が豊かになるものとして更新された。また、カリキュラム作成時の教師の迷いになるのは、教師が見通した材の価値への不安といった教材化にかかわるものであった。ただ、その迷いから一歩踏み出せたのは、授業での子どもの実際の姿であった。これが、その授業にとっての軸を、子どもとともに再構築していくことにつながったと考えている。

さらに、年間を通した長期にわたっての実践だからこそ子どもの思いの変容をもとらえることができた。このことから、教師が子どもと共にカリキュラムを更新し続けることが、教師にとっても、子どもにとっても学びをより豊かにしていくことにつながるといえる。

6. 結論の意義と今後の課題

本実践から見出されたことは子ども主体の授業にかかわる教師の在り方の重要性を示していると言える。子どもの「やりたい」という思いがより豊かに実現していくためには、教師自身が学びの可能性を見出せるように、事前の教材研究などで軸を持った上で、それを目の前の子どもと再構築していくような授業づくりが大切であると考えられる。しかし、1日6時間もの授業を進める教育現場の日々の中で、どれほどそれが可能になるのか、今の筆者にとっては未知である。さらに、現段階では、本実践で軸と表したものの具体には言及できておらず、今後教育現場にて、実践を重ねる中で少しでも確かにしていく必要があるように思う。本実践での学びを手掛かりとして、絶えず可能性を探り続けながら子どもと向き合っていきたい。

文 献

- J.デューイ著/市村尚久訳 (1998). *学校と社会・子どもとカリキュラム*, p273 講談社.
- J.デューイ著/市村尚久訳 (2004). *経験と教育*, 講談社.